



江川酒(井桁十六花卉菊の紋章) 伊豆の国市

ある日のこと、鷹狩で訪れた家康公に酒を献上したところ、とても気に入って喜び、その酒に使う井戸水を讃えました。その際に、家康公

がみずから河原に咲く菊を摘んで「家紋にせよ」といったため、江川家の家紋を「井桁十六花卉菊」の紋に改めたと伝えられています。また、江川家の造った酒を大坂夏の陣に献上し、重陽の酒として好まれたともいわれます。ちなみに、現在は地元の「江川酒を造る会」により酒づくりが復活し、幻の酒として人気だとか。

おひ がね

帯金伝説 磐田市豊田町

磐田市豊田に「帯金」という姓の家があります。武田信玄との戦いで、家康公は敗れ逃げ、この帯金の家の門に立て籠りました。敵が去り帰ろうとすると、旅金が少しもなかったことに気づいた家康公が「少し金を貸してくれないか」とこの家の主に頼むと、すぐに帯の間にあったお金を差し出しました。その後、家康公はその主を呼び出して、「その節は世話になった。以後、名字帯刀を許す。名字は、そちが帯の間から金を出したことから、帯金がよからう」と帯金の姓を与えたといいます。



見渡し御朱印 周智郡森町三倉

信玄との戦いで家康公が一人逃げているとき、草刈りをしていた百姓の久右衛門に助けを求めました。久右衛門は急いで家康公を草籠の中に入れ、その上に刈った草を一面にかぶせ、姿が見えぬようにしてかくまいました。家康公は「おかげで救われた。天下を取ったなら、きつと恩賞を贈ろう」と去りました。その後、家康公は、久右衛門を呼び出し「その節はありがとう、褒美として、その方の門前に立ち、見える限りの田畑を与える」と、御朱印のある書状を下付けしました。

池田渡船伝説

磐田市豊田町

元龜3年(1572年)、家康公は一言坂の戦いで破れ、数人の家来を連れて池田まで来ました。渡船方の庄屋をしていた善右衛門は船頭衆を10人程呼び集め西岸の半場まで無事に渡すと、家康が「ここは何と申すか」と聞いたので、「半場と申します」と答えたところ「これから半場の姓を名乗れ」といわれたそうです。

名付け
名人でも
あるぞ!

ごほうびの話



【静岡県民の皆さまから寄せられました】
郷土に残る、言い伝えなどを大調査!

家康公ゆかりの 「こと・もの」

エピソード集

ふじのくにに残る
逸話、昔話を
ご覧あれ!



徳川家康公は、戦国の時代を生き抜き、後の260年余の平和な江戸時代を築きました。その生涯の大半を過ごした静岡県には、家康公ゆかりの史跡や、言い伝え、食や技術等が数多く残されています。

静岡県では、平成27年に徳川家康公没後400年という大きな節目を迎えることから、未来に継承すべき郷土の財産として、ゆかりの「こと」や「もの」を調査・掘り起こしました。

みなさまにも調査・募集を呼びかけたところ、

たくさんの応募をいただきました。ありがとうございました。

本誌・ふじのくに家康公観光事典は、これらの調査結果をもとに作られています。ここでは、そのなかからいくつかのエピソードをピックアップしてご紹介いたします。

家康公ゆかりの 「こと・もの」

エピソード集

不思議な話



園田の三度栗 周智郡森町

武田方との戦いに敗れた家康公はお腹がべこべこになり、農家の庭先に座り込んでしまいました。農家のお婆さんが「よかったらおあがりください」と、生の栗の実を出したところ、家康公は、大喜びでむさぼり食べました。「命拾いした」と厚くお礼を述べ、食べ残した1つの栗の実を庭先に埋め、「わしの食べた分だけ実ってくれよ」といいながら2、3回踏みつけて、去っていきました。やがて、そこから芽が出て、大きく育った栗の木からは、6月、9月、11月と、1年のうちに3度花が咲き、実をつけたということです。

三川の三度栗 袋井市三川



袋井市三川にも「三度栗」の話が伝えられています。家康公は武田軍に追われてこの辺りに逃げ込み、急いで腹ごしらえをしようと、弁当の包みを開きましたが箸が入っていません。家来が近くにあった栗の木の小枝を折って渡し、家康公はその栗の枝を箸にしました。食べ終わるとその小枝を地面に突き刺し「もし、わしが天下を取ったら、1年に3度実を結ぶのだ」と強くいいました。その後、この箸を使った栗の木には、1年に3度実がなるという不思議な木になりました。

孫三稲荷と家康公 静岡市

家康公が安倍川を家臣たちと越えようとしたのですが、川の流れが強く困っていました。すると一人の男が現れて、家康公一行を無事に対岸まで案内しました。名前を尋ねると「孫三」と答えて再び川を越え戻っていきました。後日、お礼を言おうとしたが、いくら探しても孫三という人物は見当たりません。家臣の一人が、案内してもらった場所にお稲荷さんが祀ってあったので覗いてみると、何と「孫三稲荷」とありました。お稲荷さんの化身が、家康公を助けたに違いないと、以後大切に祀ったといわれています。



二本杉と弁当野 浜松市天竜区、北区奥山浜北区

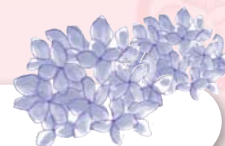
佐久間町の河内川のほとりに大杉が二本並んでいます。昔、家康公は信玄勢に追われてこの辺りを逃げていました。お腹が空き、弁当を出して食べ始めましたが、もう敵兵は近くまで来ています。半分ほど食べたところで「ええい、しかたがない」と、箸を地に刺して逃げ出しました。するとその二本の箸が芽を出し、成長して二本の大杉になったといわれています。また、浜北区中瀬に「弁当野」というところがあり、ここも、家康公が弁当を食べたと伝えられています。



了仙寺 下田市

大坂夏の陣の際、目に病を持った徳川家康は、家臣の勧めにより、当時目の神様として崇められていた行学院日朝上人に病平癒の願をかけまし

た。その祈願が成就したため、寺を建立することを約束しました。第3代将軍家光時代に了仙寺が建てられて以来、寺の寺紋は、徳川家の紋である三つ葉葵となっています。了仙寺は、下田条約が締結された寺として、ペリーなどアメリカ使節の接待所兼徳川幕府との交渉場所となったことでよく知られています。



阿弥陀橋 浜松市中区

三方ヶ原の合戦に敗れた家康公が逃げてきて橋を渡ろうとしたところ、肝心の橋が焼け落ちてありません。家康公は立ち往生し「もうだめか」と覚悟を決めたとき、近くの常楽寺から、ふわりと阿弥陀さまが出て来て、橋のかわりにこちらの岸からむこう岸へからだを横たえたのです。家康公は思わず手をあわせ、阿弥陀さまの橋を馬で渡り、無事に浜松城へ帰ることができました。その後家康公は新しく橋を架け、「阿弥陀橋」と名づけました。今も常楽寺のご本尊の阿弥陀様には、馬のひづめの形が残っているそうです。現地には、郷土史家有志が建てた「史跡阿弥陀橋之跡」の石碑があります。



しんじん深い話



椿姫観音 浜松市中区元浜町

椿姫観音のある地は、引間城主の妻、お田鶴の方が家康勢に攻撃されたとき、女ながらも懸命に戦い、侍女たちと共に討死して果てたところといわれています。家康公はお田鶴の方と侍女18人を手厚く葬り祠を建て、正室築山御前がその周りに100本余の椿の木を植えて供養を営みました。毎年椿の木は美しい花を咲かせ、人々は椿姫塚(またはお台塚)と呼び追善供養を捧げています。お田鶴の方は家康公が駿府で人質時代にひと目惚れした「初恋の人」であったとも伝わっています。



哀しい話



つらいこともあったのじゃ...